

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書**

平成 27年 8月 22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻井 昭雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)

職名・学年 博士後期課程1年

氏名 齋藤 幹樹

助成の種類	平成 27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	第13回 国際認知言語学会 The 13th International Cognitive Linguistics Conference			
発表題目	The Effect of Constructional Subschemas on Acceptability Judgment			
開催場所	Northumbria University (Newcastle, England)			
渡航期間	平成 27年 7月 15日 ~ 平成 27年 7月 30日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000	円	
	使用した助成金額	350,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳	学会関連費用	80,000	
		宿泊費	100,000	
旅費(飛行機)		140,000		
現地費用(鉄道・バス)		30,000		
当財団の助成について	<p>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)</p> <p>この度は貴重な御機会を誠にありがとうございます御座いました。御財団のこの度の御厚意により、国際学会発表を通じて多くの研究者の方々と交流をする事が出来、且つ自らの研究に対して幅広い視野からの様々な意見を得る事が出来ました。本当にありがとうございます御座います。今後も同様の支援を通じて、私と同じような若手研究者の方々がより多くの国際学会発表の機会を得られる事を期待しております。</p>			

成果報告書および成果の概要は、財団に郵送(あるいは持参)するとともに、Excel・Wordファイルでメール送信して下さい。メール送信分の印鑑は不要です。

## 成果の概要／齋藤幹樹

### 1. 概要

学会名称：第13回国際認知言語学会

会期：2015/07/20～2015/07/25

場所：Northumbria University, Newcastle upon Tyne, England

発表日時：2015/07/20 10:50～11:15

英題：The Effect of Constructional Subschemas on Acceptability Judgment

和題：下位構文スキーマが容認性判断に与え得る影響の統計的考察

### 2. 成果報告

私齋藤幹樹はこの度御財団の御助力の下、第13回国際認知言語学会において研究発表を行った。同学会は私の研究が主として属する認知言語学分野において最も権威ある国際学会の内の一つであり、世界中より多くの研究者が一同に会する大規模なものである。開催地はイギリスであり、本来資力に乏しい私には参加の難しい開催条件であったが、御財団の御助力により、この困難を乗り越え、無事に研究発表を為し得た。以下、その成果について報告する。

#### 2.1 発表内容

私の研究発表の内容(タイトル)は上に記したように「下位構文スキーマが容認性判断に与え得る影響の統計的考察」である。簡単な例を通じて本研究の内容について簡潔に述べる。

例えば「鉛筆先生」と「先生鉛筆」を比べてみて頂きたい。これらはどちらも名詞が2つ結合したものであり、どちらも造語である。よって、どちらも同じくらい「変」であり、「普通でなく」、「理解しがたい」はずである。しかし実際に日本語母語話者に対してこれらの造語がどれくらい理解しがたいか聞いてみると、多くの方が前者(鉛筆先生)を後者(先生鉛筆)に対してより自然(理解しやすい)と回答する。これはなぜであろうか。これこそが私の行った研究発表の主軸となる問いである。

この時の「変」あるいは「理解しがたい(しやすい)」という評価軸が「容認性」

であり、この容認性を例えば 0 から 5 の数字で表してもらう作業が「容認性判断」である。

上記の問いに対し私は、統計的手法とコンピュータプログラムを用い、多数の統計的モデルを作成・比較検討し、次のような答えを結論として示した。すなわち、「○○先生」(例：金八先生、熱血先生)という形では見聞きした事があるが、「先生○○」という形ではほとんど見聞きした事がない(から上記のような容認性の違いが生じる)。

この時の「○○先生」や「先生○○」という形の言語知識を、「先生」や「鉛筆」等の「単語」レベルに対して、「下位構文スキーマ」と呼ぶ。

本研究は特に日本語の名詞-名詞型の複合語を対象にしたものであるが、同種の研究が積み重ねられる事で、「容認性の違いはなぜ生じるか」という大きな問いに対する貢献が期待される。そしてこの容認性の問題は、さらに大きな(例えば)「なぜ非母語話者の喋る日本語(英語)は不自然に聞こえるのか」や「なぜコンピューターは人間のように自然に話せないのか(話させるにはどうしたら良いか)」や、あるいは「コンピューターに自然な造語(人間のような創造的な発話)をさせるにはどうしたら良いか」といったような、より大きな問題の基盤となり得る。その意味で本研究は理論的貢献のみならず、将来的な社会貢献の可能性を秘めたプロジェクトであり、この度の研究発表の機会は非常に大きな意義を持つものであったと考えられる。

## 2.2 人的交流

次にこの度の研究発表を通じての他研究者との交流について述べる。私は本研究発表を通じて、世代や国の垣根を越え、多くの研究者の方々と知り合い、情報を共有する事が出来た。その中でも最も私のこれからの研究にとって大きな意義を持つのが、同様の研究を行っているある研究者の方との邂逅であり、私は今後この研究者の方の下に留学をし、研究を発展させる事を考えている。これはまさに今回のこの研究発表の機会がなければ決して得られなかったであろう千載一遇の出来事であり、この一点を以てしても私は御財団に心よりの感謝を表したい。

もちろん他にも同様あるいは関連する研究を行う多くの研究者の方々と出会い、意見交換をし、その内の幾人かについては個人的にメールのやり取りを現在しており、アイデアの共有はもちろんの事、学位論文やその他の関連論文

の共有等を通じて、今後ともども協力し合っていける関係を築く事が出来た。

私の研究は、あらゆる言語で同様の実験を行う事が重要である。ある言語(例えば日本語)に特有の現象ではなく、言語理解に普遍的に関わる、人間の言語処理能力を探るものであるからである。その意味でもこの度の研究発表を通じての各国の方々との邂逅は非常に意義深いものであった。

### 3. 謝辞

上記のような研究者との出会いはこの度の研究発表の機会が無ければ決して得られないものであったであろう。この度の研究発表の機会が、私の研究のみならず、私の研究人生そのものに対しても大きく影響を与えた事は確実である。そしてこの度の研究発表の機会はひとえに御財団の御協力によるものである。最後になるが、このような貴重な御機会を下さった御財団に心よりの御礼を申し上げます。本当にありがとうございます御座いました。